

小学校 高学年の部

最優秀賞

悔しさの中で見つけたこと

石岡市立小幡小学校 4年 北村 桃奈

負けた瞬間、私は頭の中が真っ白になった。

「予選敗退だ、もう全国大会に行けない…。」

手足が冷たくなって手には汗をかいていた。涙が出てきたけど、私は大泣きしたい気持ちを必死でこらえた。私の介助についていた父が言った。

「結果を発表するまではわからない。まだ決まったわけじゃないよ。」

そう言われたので、私はまだあきらめないで決勝進出者の発表を待とうと思った。

オセロキャラバンの県大会、予選四戦目で私は負けた。三勝一敗。予選を通過し、決勝トーナメントに進めば、全国大会に行ける。私の目標は全国大会で八位入賞することだった。まさか、予選で負けるとは…。

予想外に相手の子は強かった。打ちたいところに打たせてもらえず、先をよんで打ったつもりが、相手はもっと先までよんでいて、苦しい対局だった。昨年の全国大会から一年、一生けん命がんばってきたのに。

結局、私は予選リーグ通過の二名に入れず、決勝には進めなかった。あの一敗で、全国大会への道が完全に絶たれた。もう何も考えられなかった。

大会が終わって、私の頭をなでながら母が言った。

「一年間、よくがんばったね。」

その瞬間、こらえていた思いが爆発し、涙がぼろぼろ出て止まらなくなった。言葉が出なかった。悲しくて悔しかった。私を車いすからおろして、抱きしめてくれ、母は言った。「よくがんばったよね。遊びたいときにもがまんして、夜遅くまで練習して、ずっとがんばってきたね。桃奈は生活するだけでも大変なのに、健常者と同じようにオセロの大会に挑戦しているんだからすごいよね！前の生活からは考えられないよね！」

その言葉に、泣いていた私はハッとした。悲しいし、すごく悔しい。でも、大好きなオセロを、目標に向かって一生けん命がんばってこれたことは、すごいことだ。

私はせきずい性筋いしゆく症という難病で、首もすわらず、寝返りもできず、自分の力で動くことができない。呼吸障害もあり、以前は入退院を繰り返していた。ぜんそくもあったので、救急外来に行くことも多かった。何日も痰に苦しめられて、たくさんの薬を飲み、吸入をし、呼吸器をつけ、生きるだけで精一杯の生活をしていた。その頃、私の楽しみは、なんとか動く右手でできる、DSをやることくらいだった。

そんな私が、今では体調が安定し、やりたいことが見付き、目標に向かって挑戦できるようになった。

しかし、私は手も自由に動かせない、すべてのことに介助を必要とする。腕も動かせない、自分で食べることもできず、本のページもめくれず、かゆいところもかかない。だから、介助があってはじめてやりたいことができる。私がオセロをやる時は、介助者に、オセロ盤の打ちたい所を言葉で伝えて、石を置いてもらい、返してもらう。両親を

はじめ、ヘルパーさんや施設のスタッフが手伝ってくれて、やっとオセロの練習や勉強ができるのだ。そして、兄や祖父母、学校の先生や友達、周りの方々が、いつも私を応援してくれている。

そう考えたら、私はなんて幸せなんだろうと思った。体は不自由でもこんなに元気になり、周りの人に恵まれ、やりたいことができる。本当にありがたいなと思った。

今年、私は目標を達成できなかったけれど、その悔しさの中で見つけたことがある。それは、元気で好きなことに挑戦できることのありがたさと、支えてくれる周りの人たちのおかげで、私はがんばれるのだということ。その感謝の心をいつも忘れずに、また来年の大会まで、精一杯がんばって行こう！